

図書館だより

文化学園図書館

文化学園大学・文化ファッション大学院大学
文化服装学院・文化外国語専門学校

No.153

2012年1月20日発行
東京都渋谷区代々木3～22～1
TEL.03-3299-2395
FAX.03-3299-2604

転機は好機

文化学園大学教授(日本語教育実習担当) 齊藤 真理子

シンガポール教育省語学センターの先生に声をかけていただき、現地の日本語教師を対象にセミナーを行う機会を得た。ACTFL-OPI(全米外国語教育協会の会話能力試験)の概要と、OPIで用いる質問技術について話をしてほしいということであった。

今から20年前、文化外国語専門学校の日本語科から単身文化女子大学へ異動となった。ただ一人の環境に不安を覚え、何か新しいことを学ぶために4日間のACTFL-OPIワークショップに参加したことを思い出す。その後テスター(試験官)となり、他のテスターたちとの研究会に参加するようになった。

振り返ると、OPIを学んだことで新しい世界が広がっていた。他機関で教えている教員たちと出会い、多くの教師とのネットワークができたこと、仲間たちとデータの分析などを続け、研究発表や論文執筆を行ったこと、ACTFL認定OPIトレーナーとなったこと、中級向け・上級向けの会話テキストを出版できたこと…。

今年度、私は定年を迎える。これを機に自分を見つめ直そうと「キャリア年表」なるものを作成してみた。たまたま手にした久恒啓一氏の『図解仕事人』(光文社新書)という本で勧められていたもので、「年号・年齢」「時代・節目」「社会の動き」「仕事歴」「学習歴」「経験歴」といった項目を立て、各年の主

な出来事を記入していくものである。

自らの「年表」を振り返り気づいたことは、何か新しいことを学んだり、体験したりしたことにより、新しい世界が広がってきたということであった。大学時代にESS(英会話サークル)に入り、ディベートやスピーチをしていたこと、東南アジアを一人で放浪したこと、中国へ短期留学したことなどそれぞれの学び・体験がその時には予想もしていなかった世界へとつながっていったことに改めて気づく。また、近年の学び・体験は仕事関係のものに限られているという少し悲しい事実にも気づいた。

確実なものは何もない時代を生きているということを感じ強く思う。そんな時代に何をすべきなのだろうか。形あるものはいつなくなるかわからないが、自分自身が身につけたものはなくなることはない。自分に力をつけること。多くのことに興味を持ち、読書をし、映画鑑賞をし、人との交流を大切にすること。教師は、講義を準備することでさらに学んでいくことができ、自分自身が学び・体験したことを学生たちに還元していくことができる有り難い職業である。定年を迎えるにあたり、自分自身の人間力を高めるために、新たな楽しい学びを始めようとシンガポールの海に誓った。

『不安定からの発想』

文化服装学院講師(ファッションビジネス論担当) 澤谷 目童

“Think different.”この言葉を聞いて、^{かじ}齧ったリンゴマークをイメージする人は私以上に相当なApple信者であるに違いない。そう、類い稀な才能を持ち世界中の人々がその死を惜しんだ、Apple社前CEOのスティーブ・ジョブズ氏が残した言葉である。正確には、スティーブ・ジョブズ氏がApple社に復帰し、1997年に打ち出したキャンペーンで使われた言葉である。このキャンペーンのCMで使われた最後の一文は永久にApple社の思想として受け継がれていくと思われるメッセージが込められていた。「自分が世界を変えられると本気で信じる人たちこそが本当に世界を変えているのだから」。この一文はApple社の本質を表していることはもちろんのこと、Apple社を信奉する者にとっては、ファンであり続けるための大切な理念でもある。さらに付け加えるならば、既成概念にとらわれず一歩先を見据え、物事の見方・考え方を多面的にとらえ行動していくというこの考え方は、少なくともファッション教育に携わる者として教育の根源となるべき一文としてとらえるべきである。さて、話がまったく本題(思い出の一冊)からはずれ、ジョブズ氏の追悼文になってしまったが、ここで氏のことを語るのは私しかいないとの使命感からスペースを割いてしまった。ならば、スティーブ・ジョブズ氏に関する本を紹介すればよいのだが、あえて今回の「思い出の一冊」として取り上げた『不安定からの発想』という本から受けた影響について記すこととする。初版は1977年にダイヤモンド社から刊行されたものであるが、著者である佐貫亦男(1908-77)氏は航空宇宙工学の専門家であったことから内容の半分以上が航空工学の理論と技術的なことが記され、いか

に飛行機が飛ぶかまでの進化論が全面に語られた単行本サイズのものである。実は私は自他ともに認める、学院でも一、二を争う飛行機嫌いである。観覧車にも乗れないくらい高所・閉所恐怖症の者が航空工学理論・技術の歴史を謳われてもなんの興味もわかずに流し読みをする本にすぎなかったが、もともと『不安定からの発想』というタイトルに惹かれ、“安定を捨てよ!”と書いてある帯の大きな文字に期待感をもって購入した覚えがある。読み進むと本書は一見、航空工学の技術本かと思いきや、実は社会経済の不安定とそこからの脱却を空と飛行機の不安定さとたとえ、工学的で力学的に、心理的にも変化に対応していくかという人生論の本だったのである。なぜライト兄弟は空を飛べたのかという永遠のテーマに対し、本書は不安定な現代を生き抜く逆転の発想と説いた。過度な安定化は混乱を招き、むしろ、不安定な社会を乗り切ろうとするときこそが変革のチャンスであると。常に安定が保障されるわけでもなく、逆に安定に身を置かず、自らが操縦桿を握ることで安定を生み出すことになる。

今後もコンピューター技術の進化は速度を早め、操作方法も大きく様変わりをしていくことになる。現在はスマートフォンで主流の音声入力にさらに進化し、人工知能を搭載したかのようにすべての作業を音声入力で動作していくシステムがあたり前になっていく時代。飛行機も操縦桿を握らず、パイロットや管制官の声や意識だけでどんな空の変容にも対応し空を飛び続けることができれば、いやもしくはApple社が飛行機を造ったら空の旅でも満喫してみようと想う。

*佐貫亦男著『不安定からの発想』講談社学術文庫 2010(538/S)

『雛形春日山』

文化学園服飾博物館学芸室室長 植木 淑子

『雛形春日山』は、明和5年(1768)に発刊されたきものの模様集である。江戸時代の寛文(1661-73)から文政(1818-30)頃にかけて、約180種のきものの模様集が刊行されたことが知られ、ここに紹介する『雛形春日山』もその1種である。

江戸時代のきものの模様集は、小袖雛形、模様雛形あるいは雛形本などと呼ばれ、ほとんどは木版による黒の1色摺りで、半紙を二つに折り、袋綴じとした体裁である。模様図は1頁に1図が掲載され、きものの形を線で表し、その中に模様が描かれている。そして、余白の部分に模様の題名、地色、染織技法などが記されている場合が多い。模様図の収録数は、それぞれの雛形本によって多少の違いが見られるが、およそ100図前後である。雛形本は主に町方の人々が見て楽しむ絵本的な性格を持ち、初期においてはその傾向が強かったと考えられている。また、呉服店ではきものの注文を取る際の見本帳とされ、今日のファッション・ブックのように流行をリードする役割を果たしていた。このため、現存する江戸時代のきものの中には、雛形本の模様ときわめて類似するものも見受けられる。

『雛形春日山』は上中下の3巻からなり、94の模様図が収録されている。刊記によれば、版元は大阪の柏原屋清右衛門と京都の菊屋喜兵衛、作者は三文字屋弥四郎である。三文字屋弥四郎は、京都の模様絵師であり、『雛形千歳草』『雛形井関川』『伊達紋鏡』なども手がけ、18世紀半ばに活躍したことが知られている。なお、『雛形春日山』の題名は、様々なきものの模様図を奈良・春日山の四季折々の風景になぞらえたものであること

が序文に記されている。

まず、模様配置に着目すると、きもの全体に配置する総模様、腰から下に配置する腰模様、裾を中心に配置する裾模様が見られる。この中の裾模様は18世紀前半から新たに行われるようになった模様配置であり、『雛形春日山』には13図が認められる。これは全体の2割にも満たない数であるが、「江戸裾」、「総江戸裾」、「下裾」あるいは「裾下」の3種が描き分けられている。模様図によれば、「江戸裾」は襟先から裾にかけて模様を配置し、この模様と関係のあるモチーフを伊達紋(装飾を目的とするおしゃれ紋)とする。例をあげると、「から紅」と題された模様図(図1)は、襟先から裾にかけて流水と紅葉を表し、武官の冠と弓矢を取り合わせた模様を伊達紋とする。これは『古今和歌集*』の「ちはやぶる神世もきかず龍田河 韓紅に水くるとは」にちなみ、伊達紋の冠と弓矢は、この歌を詠んだ在原業平の武官の姿を象徴している。また、「総江戸裾」(図2)は、襟先から裾にかけて模様を配置するが、伊達紋を付け

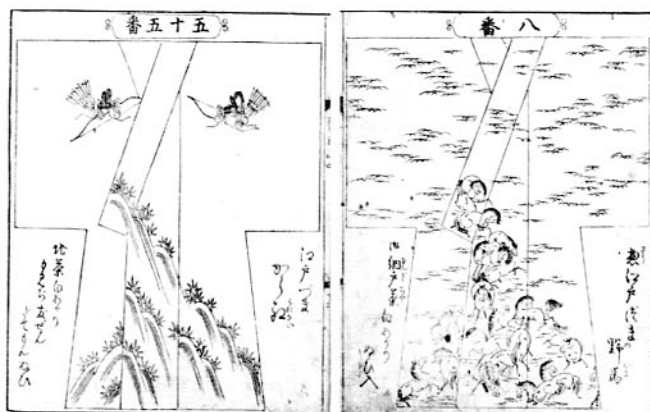


図1 江戸裾「から紅」

図2 総江戸裾「野馬」

ず、裃模様と関連する小さなモチーフをきもの全体に表す。さらに、「下裃」あるいは「裃下」(図3)は、前後の裾の低い位置に模様を配置し、この模様と関連するモチーフを伊達紋とする。3種の裃模様の中で、「総江戸裃」は『雛形春日山』のみに見られる模様配置である。

模様の題材は、花・草・木・鳥・獣・風景・器物・文芸や故事にちなむものなど多くが取り上げられている。これらは様々にデザインされているが、小ぶりの模様として構成し、きもの全体や腰下に散らすように配置する形式が多く見られる(図4)。「雛形春日山」で注目されるのは、茶道で用いる名物裂めいぶつぎれをデザインソースとしている模様である。

「南天更紗」と名づけられた模様は、南天をインド更紗の小花模様のように構成している(図5)。また、「嵯峨切」という名の模様は、「嵯峨切」そのものが名物裂の名称であり、この裂に織り出される桐の葉と入子菱を組み合わせた模様を描いている(図6)。名物裂は中国をはじめ、インドや東南アジアの島々から船載された染織品であり、これをきもの模様としたところが斬新である。

きもの地色については、青系と茶系がほぼ同数あり、これらの色が全体の半数を占める。青系では花色ちくさ、千種、あさぎ、ききょうなど、茶系では御納戸茶おなんど、こび茶、鶯茶、せんざい茶などが見られ、同じ系統の色であってもいくつかの色が使われている。この他には、黒、けんぼう、ねずみ、紅、

紫、藤色なども見られる。

染織技法については、白上げに刺繍や色挿しを加えるものが7割以上に及ぶ。白上げとは、糊防染により地色を白く染め残して模様を表す染色技法である。すっきりとした印象があり、18世紀半ば頃より多用されるようになった。この他には、刺繍のみで模様を表す素縫いが1割ほど、友禅染、墨絵、茶屋染などがわずかに見られる。

雛形本はそれぞれの刊行当時のきもの流行を如実に示すものであり、『雛形春日山』にも、18世紀半ばから後半にかけての様子が示されている。それは、裾を中心に模様を配置する裃模様や、小ぶりの模様を散らす形式、青や茶の系統の地色を多用すること、多くは白上げに刺繍や色挿しを加える模様表現などである。これらは繊細さや渋さを好む美意識によるもので、江戸時代後期の町人による独自の文化が形成されつつあった時代が反映されている。なお、当館所蔵の『雛形春日山』には、上巻と中巻の表紙見返し、下巻の裏表紙見返しに「福光寺新町 川合田屋忠七郎」の署名がある。また、一部に彩色が加えられ、呉服屋が所有し、実用に供されたものと考えられる。

*小松正夫・前田成穂 校注訳『古今和歌集』(新編日本古典文学全集11) 小学館 1994 (918/S/11)

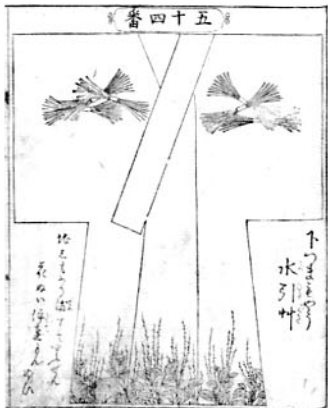


図3 下裃「水引草」



図4 「笹波」



図5 「南天更紗」

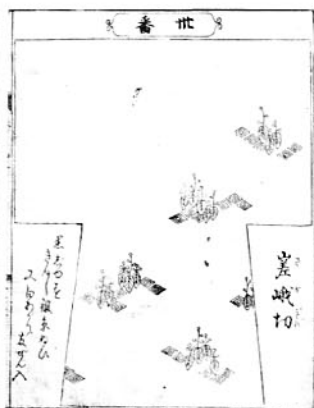


図6 「嵯峨切」

『免疫健康学 病気になる体質を変える!』

文化学園大学准教授(機能デザイン学担当) 永井 伸夫

本書は、免疫学の世界的権威として知られている安保徹先生が「晴れた日になぜ虫垂炎が増えるのか」という臨床データから端を発して、生体の健康状態を維持する自律神経系、免疫系の相互関係とメカニズムをわかりやすく解説し、元気で長生きする秘訣について述べている。

ところで「免疫」とは何かというと、身体の中に病気の原因となる細菌などの異物が入り込んだ時、あるいはがん細胞など異常が起こった時にそれらを取り除く防御システムである。この免疫系を担っているのは白血球で、その内訳は顆粒球が約60%、リンパ球が約35%、マクロファージが約5%である。顆粒球やマクロファージは細菌などの比較的大きな異物を貪食(異物をのみ込む)し、リンパ球は顆粒球で処理できないウイルスなどの小さな異物を処理したり、抗体をつくったりする。これらの免疫系をコントロールするものとして「自律神経」がある。自律神経とは、心臓の拍動や胃腸の運動のように、意志とは無関係に体内の働きを自律的にコントロールし健康を維持する機能を担っている。またこの自律神経には、「交感神経」と「副交感神経」があり、両者は相反する方向に働き、興奮したり活発な体調をつくるのが交感神経で、リラックスする体調をつくるのが副交感神経である。免疫システムは自律神経の支配を受けており、その基本的なメカニズムは、交感神経が優位になると顆粒球が増え、副交感神経が優位になるとリンパ球が増えると考えられている。悩み、悲しみなどのストレスが強かったり、ハードワークや不規則な生活など無理が続くと交感神経が優位となり、このようなタイプを「顆粒球人間」と著者は表現し、活動

的で少々怒りっぽかったりして、胃腸の疾患になりやすかったり、さらにはがんになりやすい一面をもつと述べている。一方、おだやかな日常を送り、いつもニコニコ、副交感神経が優位なタイプを「リンパ球人間」としているが、副交感神経が優位になりすぎても代謝が低下したり、アレルギー性の疾患になりやすいと述べている。

また、気圧と自律神経および免疫との関係についても、高気圧—交感神経—顆粒球、低気圧—副交感—リンパ球、という関係を導いている。冒頭の「晴れた日の虫垂炎」の謎は、晴れて高気圧の時に顆粒球が増えて、自分の身体を攻撃したために起きた現象なのである。

自律神経と免疫の関係に関する安保先生の多くの論文での研究成果は、本書にわかりやすく掲載されている。交感神経が優位になれば顆粒球が増え、副交感神経が優位になればリンパ球が増えるという新事実により、身体の病気と心の状態が密接に関わっていることがわかり、まさに「病は気から」が科学的根拠をもって裏付けられたといえる。また、世の中には病気になりやすい人とそうでない人がいると思われるが、わずかなことを気にして悩みやすい人は、病気を自ら呼び込んでいるようなところがあり、気持ちのあり方が自律神経にも作用すると考えられる。交感神経と副交感神経のバランスのとれた生活を心がけ「養生」することにより、毎日を楽しく病気になりにくい体質をつくることができるのではないだろうか。

*安保徹著「免疫健康学」PHP研究所 2011(491.8/A)